

# 源流の四季

第29号(2008年4月) 春



Spring

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383  
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057  
<http://www.tamagawagenryu.net>  
E-mail:genryu@ec3.technowave.ne.jp  
発行責任者/中村文明  
協力/多摩川源流協議会(甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)  
多摩川源流観察会  
印刷/(株)サンニチ印刷



小菅村の巨樹・山沢入の大トチ (撮影:中村文明)

## Contents 目次

源流の木で家を作るプロジェクト .....	2
源流大学腰板張り実習 .....	2
長作・古観音遺跡から平安土器発掘 .....	3
「多摩源流水」普及へ .....	4
森づくり意見交換会を開催 .....	4
第27回多摩川流域セミナー .....	5
シリーズ「水源林の歴史」 .....	6
今年度のイベント紹介 .....	7
第9回全国源流シンポジウム案内 .....	8

# 「源流の木で家を造る」

## プロジェクト

### 堂々たるモミの梁に歓声あがる

「源流の木で家を建てよう」と多摩川の河口・大田区の聖フランシスコ修道院の「自立のための子供寮」づくりが進められている。昨春秋に建築確認申請も終わり、十一月二十四日には地鎮祭が執り行われ、現在は基礎工事が進行している。また、すでに完成した子供寮の遊戯室には、小菅の堂々たるモミで梁ができあがり、評判になっている。「源流の木で家を造る」プロジェクトは、小菅村が取

り組んでいる源流百年の森づくりの中核をなす取り組みで、平成十九年に小菅村の今川森林団地で伐られたヒノキやスギ、モミなどを製材し、加工して多摩川の河口部に位置する大田区で利用しようと計画されたもの。

「自立のための子供寮」の設計を担当している神谷博（源流研究所運営副委員長）さんが、三月六日、大田区久が原の現地を案内しながら、「この三月末から上棟に取りかかり、今年の十一月には完成予定である。建物は、木造二階建て、子ども個室が九室、修道院のシスターの部屋が四室、それに祈りのための聖堂がある。今ある子供寮は社会福祉施設として預けられるのは十八歳までなので、子供たちが自立するまで支援しようと計画されたものが今回の『自立のための子供寮』だ。関係者は完成するのを大変楽しみにしている」



小菅村のモミでできた梁（大田区）

と取り組みの概要を説明した。完成した子供寮の遊戯室では、釘宮シスターが「コンクリートに囲まれた寮よりこの遊戯室は格段に良いです。子供たちは暖かい、気持ちよい雰囲気になれ喜んでいる。小菅村から大きなモミの梁を頂き感謝している。子供たちには、困難にめげずこの梁のようにならなくては生きていけない。願っている。」と話していた。

「小菅村の木で役場の腰板を張ろう」をテーマに、平成二十一年一月十九日～二十日にかけて多摩川源流大学のモデル実習が実施された。当日は東京農業大学の学生が地元の大工船木弘和さん、健二さんに指導を受けながら役

### プロの技に触れる貴重な体験

源流大学の腰板張りの体験学習が好評

場の受付周辺と二階会議室に腰板をはる体験実習に汗を流した。学生達が小菅村の村有林から切りだされ、加工し仕上げられたスギの板一枚一枚を丁寧に壁に貼り付けていくと、会議室は暖かい雰囲気生まれ変わった。

源流大学は、平成十九年度事業として、小菅村をフィールドに地元講師による二十二回の体験学習を実施、景観・農業体験、森林体験、源流体験、アースオーブンづくり、年末行事体験、健脚度測定など様々な分野の体験に挑戦した。

今回の腰板は小菅の木を使っている。木を山から伐り、運び出し、製材する。小菅の材で小菅村役場の腰板を張る、外材に頼る今の日本はこれからこういう事が必要だと思う」（三平祐樹）と感想を述べていた。

今回の腰板張り体験に参加した学生は、「普段金槌など工具を使う機械はないので、とても新鮮な体験だった。木材は反っていたり節があったりと思っていたより扱い難かったが、大工の方が手

際よく寸法を調整してくれた。目の前でプロの技が見られ、とても貴重な体験だった」（蔵本勇）「自分の技術が下手なりに段々と上達していくのは嬉しかった。今回の腰板は小菅の木を使っている。木を山から伐り、運び出し、製材する。小菅の材で小菅村役場の腰板を張る、外材に頼る今の日本はこれからこういう事が必要だと思う」（三平祐樹）と感想を述べていた。



腰板張り体験学習（小菅村役場）

また、今回の取り組みは、源流の木を活用して家を造ったり、腰板を張る活動の一環で、これまで腰板の関係では川崎市のせせらぎ館、東京農業大学の現代GP事務室、源流大学白沢キャンパス、川崎市の大師防災センターに続く第五弾となる。



子供寮遊戯室

# 長作・古観音遺跡から 平安土器発掘

## 山梨県埋蔵文化センターが発掘調査

山梨県埋蔵文化センターは中世寺院分布調査の、平成十九年度事業として九月十八日から二十五日にかけて小菅村・長作地区の三頭山山腹にある古観音遺跡の発掘調査を実施した。発掘調査では、平安時代の土器や江戸時代の寛永通宝などが見つかった。

今回の古観音遺跡の調査のねらいや成果について、調査を担当した山梨県埋蔵文化センターの石神孝子研究員に二月二十九日、山梨県埋蔵文化センターで中村所長がインタビューした。

### 長作の言い伝えが証明された

中村 今回の古観音遺跡調査の目的は何ですか

石神 山梨県埋蔵文化センターは、

半のものであり県内でも古いものであることから、長作地区や観音堂についてさらに詳しく調べるため、今回古観音の発掘調査を行いました。

中村 今回の調査は、どんな成果が上がったんでしょうか。

石神 発掘調査で確認されたものとして、平安時代の土器や江戸時代の銭が出ました。さらに、建物の礎石が出ました。等間隔に配置されている石は、お堂の柱を支えていた礎石の跡です。発掘調査から、東西二間・南北二間の規模のお堂であったことが分かりました。礎石は結構、周りだけ礎石だったりするんです。中は柱だとか、穴だったりする礎石だったという意味で総礎石と呼んでいるんですが、これ以上ない成果だったと思います。

中村 今回の発掘を通して、長作の言い伝えが真実だったということが証明され、驚きです。ところで、礎石には、どんな特徴がありましたか。

石神 お堂の礎石に使われている石は、この地域で「青御影」と呼ばれる石で、古観音付近の川では産出しない石です。そのため、この礎石がわざわざ他地域から搬入され、礎石として使われたことを知ることが出来ました。さらに調査では、江戸時代の古銭である「寛永通宝」

やお堂の下の層から平安時代の土器の破片が見つかっており、古観音にお堂が中世から所在した可能性が高まりました。

### 中世の道は尾根筋が主流だった

中村 国の重要文化財である長作観音堂について、何故こんな不便で遠いところに建っているのか不思議ですが、どんな時代背景があったんでしょうか。今、源流研究所では、東京電力環境部の協力を得て、古道再生プロジェクトに取り組んでいます。長作はどんな場所だったのかを探っています。

石神 中世の道はほとんど尾根沿いらしい。そう考えると、明治ぐらゐまで長作に幹線道路が通っていたことはほぼ間違いない。古観音遺跡はこの道沿いにあるということであれば整合性があると思います。

中村 なるほど。どんな古道が通っていたかが重要ですね。小菅には、大菩薩峠があり、古くから甲州と武蔵の国を結ぶ古道が通っていました。江戸時代になって大月周りの甲州街道が開けましたが、従来の大菩薩越えの道も甲州裏街道として賑わいを見せています。長作から

伸びている道はこの甲州裏街道にも通じていますね。

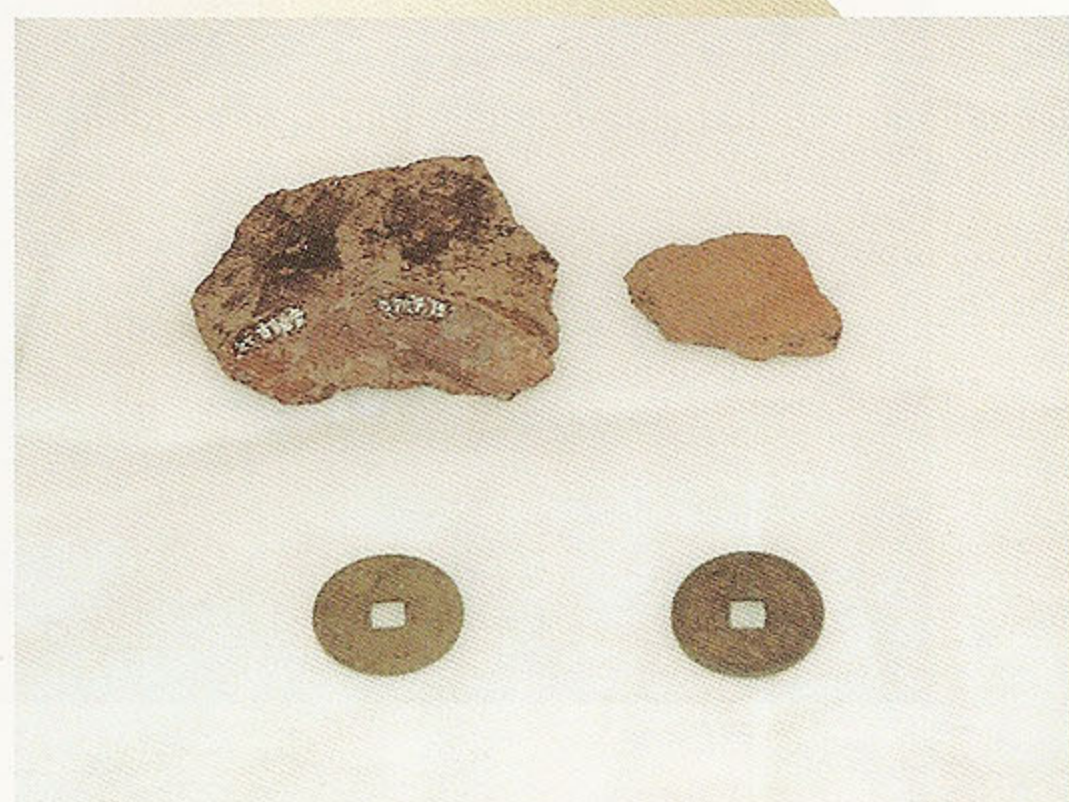
石神 そうですね。大月に行くのも尾根沿いの道が最短の距離だったと地元では言っています。今の私達からするとえーと思いますけど、日常的に尾根筋の道が利用されていた。富士山の修験道関係の調査もしていますが、やはり尾根沿いに行っています。今の道と全然違って、中世の人たちの道は尾根筋だという説明が今は通説となりつつあります。そう考えると、三頭山の道、西原の方へ抜ける道などいろいろな方向に道が延びていた。長作はやはり交通の要衝にあたりすごく重要な地域だったと考えるのが筋かなと思います。

中村 すこしずつ時代背景がみえてきたような気がします。次号では、時代背景をもっと掘り下げていきたいと思えます。石神先生、今日は有難うございました。



石神孝子先生

石神 付近には「神楽入」など信仰に関わる地名が多く残ることや、長作観音堂の建物が鎌倉時代の後



発掘された平安土器(上)寛永通宝(下)

# 「源流水」飲んで 源流の森を再生しよう

## 「多摩源流水」普及へ推進委員会設置

小菅村の財団法人「水と緑と大地の公社」が販売している「源流水」は、売り上げの一部が多摩川源流部の森林保全活動に使用されていることから、流域の市民や企業の中で関心が広がっている。同財団では、この源流水の販売を広げようと二月二十日、源流水を飲んで源流の森を再生しようという「源流の森再生基金支援事業推進委員会」を設置した。

当日の推進会議では、同財団の黒川文二事務局長が「源流水を昨年リニューアルし、大いに広げたい」と思い、源流研究所にどんな付加価値をつければいいのか相談したら、一本あたり十円の源流の森再生基金制度による他のミネラルウォーターとの差別化を図ろうということになり、昨年十月から販売を開始した。

東京農業大学では、生協で販売が始まり、河口の川崎市のをせせらぎ館では、来館者に源流水を販売して喜ばれている。狛江市の福祉施設「アイトピア」で販売を開始、青梅総合病院や中央道

の石川サービスイリアなども販売を検討している。杉並区の企業からは寄付したいと申し入れがきている。皆さんの知恵と力を借りて源流水をひろげたい」と協力を要請した。

会議には、東京農業大学の菅原泉准教授、川崎市からせせらぎ館の鈴木眞智子さん、小菅村商工会の降矢英昭会長、源流研究所の中村文明所長が出席し、それぞれ今後の抱負を語り合った。狛江市役所の小川啓二さんは仕事で参加できなかった。会議では、菅原先生を委員長に推薦した。小菅の湯で源流水を担当する古菅芳勝さんは「三箱以上まとめ買ってもらえば、送料はこちらの負担です。」と源流水をドンドン広げたいと意欲満々だった。

**大地の恵 多摩源流水**

小菅村は、多摩川の源流として知られ、その流れは春の訪れとともに水かさを増し、新緑とあいまって美しさを極めます。

岩と水と緑の支配する霊玄なる多摩源流の大地から湧き出す多摩源流水はのどを潤すのはもちろん、心までも和ませます。



写真 1.5ℓ(10本入り)      写真 500ml(24本入り)

卸価格一覧		※卸値には「源流再生基金」が含まれています。			
単位	卸値	小売希望価格	原価(日本産)	小売希望価格(日本産)	
1.5ℓ	1箱(10本入り)	1,560円	2,100円	155円	210円
500 ml	1箱(30本入り)	2,880円	3,600円	96円	120円
	1箱(24本入り)	2,304円	2,880円	96円	120円
	1箱(15本入り)	1,440円	1,800円	96円	120円

～お問合せ先～  
財団法人 水と緑と大地の公社 多摩源流 小菅の湯  
〒409-0911 山梨県北都留郡小菅村3445番地  
TEL 0428-87-0888(代表)

## 今川・鹿倉山森づくり 意見交換会を開催

### 路網の見学と 意見交換を実施

意見交換会では、午後二時から鶴峠村有林に導入された、大橋式林内路網の見学会を行い、午後七時から意見交換を小菅村役場で開催した。延べ四十五名が参加し、その中に林野庁計画課原課長補佐や山梨県森林整備課瀧口氏も加わり、制度面にも踏み込んだ議論が行われた。

大橋式林内路網は、水を山に散らす効果があるとされ、その機能の検証や強い山づくりと林業経営の両立を目指し、小菅村

が起らないことが重要である。そこで様々な森林調査を実施し、今川地区の崩壊リスクマップと大橋式林内路網路線案を作成し、それに基づき土砂崩壊防止ゾーン・保健休養ゾーン・木材生産ゾーンの三つにゾーニングを行った。また、上段の図のように各ゾーンでは目的に合わせた最終林形を設定し、それに向けた施業を行っていく。

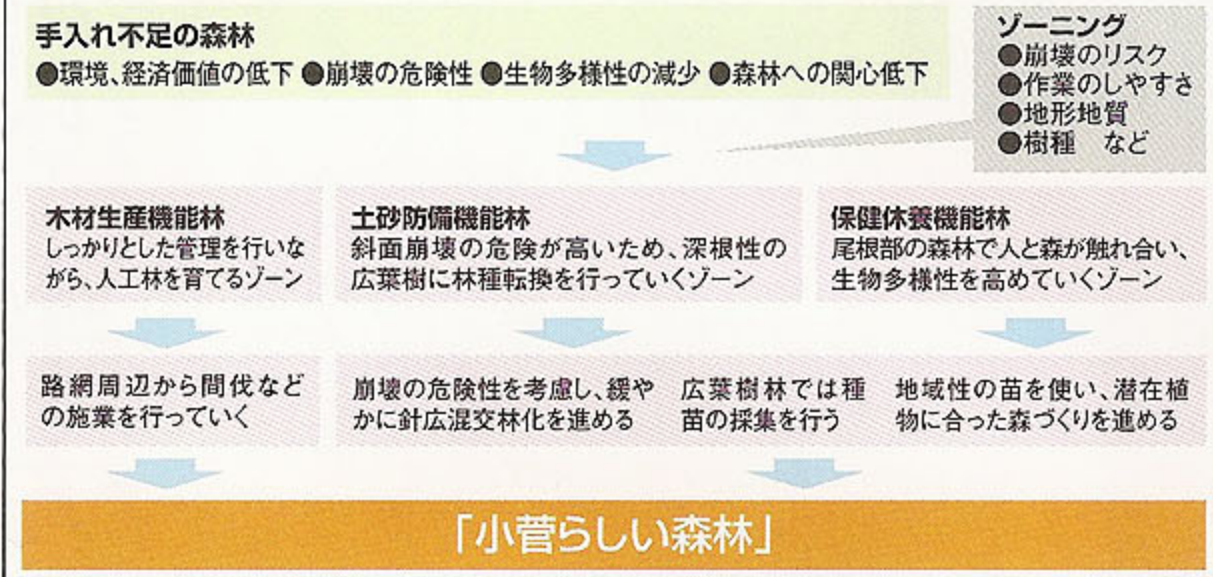
がモデル的に導入したものの。今回の意見交換会では、この取り組みについての報告や多摩川源流百年の森づくりプロジェクトで中心となった東京農業大学の菅原准教授からプロジェクトの取り組みや森づくりの将来構想について報告を受けた。菅原准教授の将来構想は以下の通り。

### 森林をゾーニングし それぞれ適正な管理を

小菅村は水源地域であることや森林と居住地が接近していることから、山に水が保たれ、崩壊

続く意見交換では、どのようにこの計画を進めていくか所有者との協議が行われ、間伐などで地域にあった補助制度の必要性や、流域の住民と二緒に路網の管理を行う必要が指摘された。最後に今後も森づくりについて所有者と行政などで情報交換を行っていくことが確認された。

### 小菅村の森づくりの方向性



## 本物の味噌をつくらう

### 「手前味噌づくりツアー」



ウスとキネで大豆を挽いてゆく

味噌をつくりながら、小菅村でゆったりとした時間を過ごす。三月八日九日に小菅村エコセラピー研究会が「手前味噌づくり」ツアーを開催し、十五人が味噌づくりに挑戦した。

このツアーでは二日目に大豆を煮込み、二日目に味噌を仕込んだ。大豆を機械で挽くことが多くなっているが、本物にこだわりの大豆を挽くのにウスを使うという昔ながらのやり方。参加者は夏に行われる味噌の天返しにも参加したいと意気込んでいた。

# 第27回 多摩川流域セミナー開催

「いのち育む河口干潟」安全・安心・やすらぎの拠点」をテーマに、第二十七回多摩川流域セミナー（多摩川流域懇談会）が平成十九年十二月十六日、川崎市大師河原水防センター会議室で開催され、多摩川流域の市民など百名が参加し、多摩川河口の環境の保全と活用を熱心に意見交換した。またこの日大師河原水防センターのオープニングが盛大に催され同センターは「干潟館」と命名された。

## 大師河原水防センターが開館

セミナーでは、多摩川流域懇談会運営委員会の長島保委員長が開会の言葉を述べた後、高橋裕会長が主催者を代表して挨拶し



第27回多摩川流域セミナー(12月16日)

た。高橋会長は「来年はこの多摩川流域懇談会が発足して満十年、九年間で二十七回セミナーが開かれている。こういう例は他の川であるのかなと思う。また、多摩川は行政の面でも流域住民の面でも日本で初めてということがいっぱいある。それだけ流域の人たちが一生懸命多摩川と付き合ってきた証拠だと思う。今日は、大師河原水防センターの開所式で流域懇談会からの松の寄付があつてその植樹祭もあり、大変記念すべき日になった」と述べられた。

## 台風の大規模化を懸念

続いて、中央大学理工学部の山田正教授が「近年の河畔災害と川づくり」と題して基調講演を行った。山田教授は、日本の誕生と川づくり、川の氾濫と人々の暮らし、日本の洪水と欧米の洪水の違いなどの近年の河川災害の歴史に触れた後、「今年の台風の大雨で小河内ダム上流で観測史上最大の七百ミリの雨量が記録され、新記録が生まれた。新記録は簡単に生まれるものではない。石原地点の計画高水位を越えた。計画高水位とはここまではしっかりと守ろうという高さ。これを越えちゃった。今、地球温暖化が進行している。温暖化が進むと台風の

発生個数は減るが、台風一個あたりの強さは強くなる。するとともに強い洪水が起きることになる。我々の子孫のためにどうするか今から考える必要がある」と指摘、参加者に感銘を与えた。

セミナーでは、NPO法人地域パートナーシップ支援センターの小山文大さんが「多摩川対岸での活動紹介〜干潟の環境と生物〜」について、NPO法人かわさき歴史ガイド協会の池上茂一理事が「大師河原に生まれ住んで」と題して、地域史研究家の長島保さんが「河口をめぐる多摩川の歴史」についてそれぞれ話題提供し、参加者によるディスカッションに移った。ディスカッションでは、多摩川流域ネットワークの中村文明副代表と京浜河川事務所の柳沢亘河川環



植樹祭

境課長がコーディネーター、中村副代表は、干潟館の二階、二階の会議室に張り巡らされている腰板は小菅村から運ばれてきた「源流のヒノキ」であることを紹介した。ディスカッションでは、「江戸前とはどこからどこまでか」「上流の森林整備や流木対策に自衛隊の活用はできないか」「上流で森をよくなるNPOがあるか」「多摩川をフィールドとしたNPOはどのくらいあるか」「山の劣化をふせ

## 全国シンポジウム成功へ実行委員会結成

今年八月に長野県木祖村で開催される第九回全国源流シンポジウムを成功させようと、二月二十七日、木祖村民センターで第一回全国源流シンポジウム実行委員会が開催された。第二回実行委員会には、国土交通省中部地方整備局河川部、木曾川上流河川事務所、名古屋市上下水道局、長野県土木部、愛知県地方振興部、岐阜県二宮市、愛知県日進市、水資源機構中部支社、木祖村ふるさと大使、味噌川ダム管理事務所、木曾森林管理所、木祖村商工会、木祖村公民館、木祖村連合自治会、木祖村議会、木祖村自然同好会など、二十八団体から約五十名が参加した。

実行委員会では、沢頭修自木祖村自然同好会会長を実行委員会委員長に、栗屋徳也木祖村村長と中村文明NPO法人全国源

ぐ方法は」など多くの質問や意見が出され、活発な意見交換がなされた。

最後に京浜河川事務所の鈴木所長が閉会の挨拶に立ち、「今日のセミナーは、洪水対策、水防の話、干潟の取り組み、河口の歴史の話とバラエティに富んでいた。この干潟館にみなさんが是非いらして頂けるよう川崎市と一緒協力していきたい。今日は本当に楽しかった。今後ともよろしく」と述べた。

流ネットワーク代表を副実行委員長にそれぞれ選出し、基調講演、基調提言、コーディネーター、パネリストなどを確定、上下流連携による源流再生の全国的なモデルをしめそうと全国シンポジウム成功に向けて健闘をそれぞれ誓い合った。



第1回全国源流シンポジウム(2月27日)

# 複層林施業を導入

## 崩壊を防ぐための 複層林施業を導入

このシリーズの第五回で、「水道水源林経営管理の歴史の中で、昭和五十一年を始期とする第七次経営計画における方針転換は、大きな意味を持っている」と書き、続けて、「しかし、その改訂の背景が林業技術者の手の及ばない『木材市況』という外的因子だったことを

原因として、その改革は進まなかった。」と私の分析を載せた。

水道水源林に甚大な被害をもたらした昭和五十七年の台風も、同じく外的因子であり、それ自体は林業技術者の手に負えないものではあった。しかし、中野秀章氏による研究成果が、人工林作りの方法を考えれば被害を抑えることが可能である、と示していたため、そのための模索が開始された。

若齢人工林の崩壊の原因は、「人工林であること」が原因ではなかった。

更新に際して皆伐して一斉造林することには問題があったのである。言い換えれば、皆伐を避けた更新法であれば、その被害は避けられる理屈である。そして、常に森林状態を維持しながら森林の更新を図れば、その根茎による土壌の崩壊防止機能は維持される、と考えたのである。

そこで具体的な手法として浮上してきたのが「複層林施業」であった。この複層林は、水源管理事務所では、国有林での事例などを参考にした。試験地を設定し、昭和五十四年から、調査研究を開始していた。その緒に就いたばかりの研究を先取りして事業化を決定したのである。

### 複層林とはなにか

複層林とは、異なる年齢の樹木が混在することで樹冠（枝葉が茂る部位）層が複数となる森林のことである。天然林のほとんどはこの姿となるが、人工林では同一年齢の樹木で構成されているため、一般的には、樹冠層は単一となる。成長の遅れなどの個体を含めると、樹冠

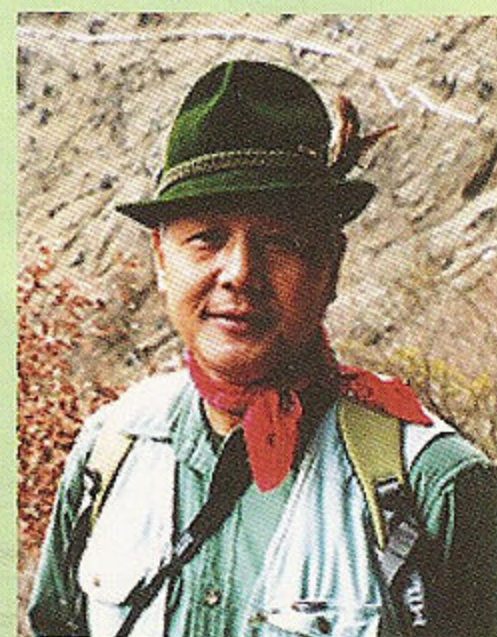
層が複数あると見られる人工林もあるが、この場合は、複層林とは呼ばない。また、スギとヒノキ、もしくはカラマツとヒノキのような混交林では、樹種間の成長に差が出てくるため、樹冠層が複数になる場合がある。しかし、これも複層林とは呼んでいない。

人工林における複層林とは、ある程度成長して森林の姿を形成した時期に強度の間伐をして、そこに生じた空間に次世代の樹木の苗木を植栽することで作られる。

先に植栽した樹木（上木）を収穫した時点で、それにより生じた空間に、次々世代の苗木を再度植栽する。この繰り返しにより常に森林状態を維持しながら木材収穫が図れる林が複層林である。

### 水源林にふさわしい 複層林を目指して

当然、皆伐跡地への植栽と異なり、陽光は十分に苗木に注がれない。そのため、下木は陰樹（不十分な陽光の下でも成長する樹種）でなくてはならない。しかし、それは、アカマツやカラマツなどの陽樹でな



元・東京都水道局  
水源管理事務所職員

堀越 弘司

ければ、どんな樹種でも良い、というわけではない。人工林とは、「木材収穫は副次的事項」とした方針の中にあっても、地場産業育成の意図などから木材収穫を継続していく林である。伐採時期に達したときに、応分の収益があらならないと場所での「持続可能な森林経営」は頓挫してしまう。下木は、陰樹でありなおかつ相応な木材価値がある樹種でなくてはならない。そこで、選ばれたのがヒノキであった。

こうして、崩れにくい森づくりの姿は描かれた。しかし、大きな問題点に気付いた。ヒノキ林は、密度管理が遅れると、容易に水源涵養や表土流出防止などの機能の低下をもたらす。複層林として、空間の立体的利用を図る複層林では、密度管理が二斉林以上に困難になる。果たして、そんな人工林の造成が「水源の森づくり」と呼べるものなのだろうか。

そこで考え出された方法が、広葉樹の利用である。すでに進入している広葉樹や植栽後に進入してくる広葉樹を適宜残すことで、土壌の劣化防止を図ることにしたのである。

（資料・東京水道一〇〇年史）



柳沢峠・水源の道からの展望

# 源流研究所ーイベント紹介

## 源流古道・水源林の旅

三年で多摩川源流を取り囲む山を周する源流古道・水源林の旅。本年は柳沢峠・倉掛峠・笠取山・唐松尾山・将監峠のBコースを実施します。コース内には多摩川源流域のシンボルである「水干」が含まれる名コースです。

尾根沿いのコースはアップダウンがあり、防火帯を進むことから熱中症などに注意が必要です。

〔日時〕九月十九〜二十日(金〜日)

〔集合〕JR奥多摩駅

〔費用〕二万五千円(宿泊費二泊六食付、保険代、その他)

〔対象〕六十九歳以下の山歩きに



多摩川源流を1周する源流古道のコース

自信のある方  
〔定員〕二十五名(先着順)

## 秘境・妙見五段の滝を訪ねて

多摩川の源流である小菅川の奥にある妙見五段の滝を見に行くツアーです。妙見五段の滝までは山に慣れた地元ガイドがいなければ辿りつくことができません。

滝までの道のりは、川に入って渡るなど溪流のぼりが含まれますので、ご注意ください。

〔日時〕七月五〜六日(土日)

〔集合〕JR奥多摩駅

〔費用〕二万八千円(宿泊費二泊三食

付、保険代、その他)

自信のある方  
〔対象〕六十九歳以下の山歩きに

〔定員〕二十五名(先着順)

【お問い合わせ・お申し込み】  
小菅村役場 源流振興課

TEL: 0428-1877-0111

FAX: 0428-1877-0933

## 今年もやっています 多摩川源流体験教室

毎年好評をいただいております

「多摩川源流体験教室」を本年も実施いたします。多摩川流域の子供たちに源流の姿を知ってもらうために行っておりますので、団体様でのお申し込みをさせていただきます。

源流でなければできない自然体験を行ってみませんか。キャンプ場や宿泊施設もご案内いたしますので、夏のキャンプなどで実施をお考えの団体様はぜひご相談ください。

〔期間〕七〜八月

〔体験場所〕小菅川源流部体験コース内

【お問い合わせ・お申し込み】

多摩川源流研究所

TEL: 0428-1877-0555

FAX: 0428-1877-0557

## 多摩川源流大学講義のお知らせ

さまざまな河川の最上流部である源流域の文化は「農」や「自然」の文化そのものであり、それらの地域固有の生活文化は、地域の自然と共生した循環型の営みによって築かれてきました。こうした文化を本物として再確認し「源流学」として各分野の先生方に講義をしていただきます。また、講義の最後には小菅村に実習におもむき、農作業や森林管理を通して源流域を学んでいただきます。なお、本講座は農大生の授業と連動しています。

### ●体験コース(山梨県小菅村)

8月9・10日(土日) 森林体験:自然散策や農業体験を予定

### ●座学コース(講師は予定)

(16:20~18:00 世田谷キャンパス1号館4階メディアホール)

- ①5月14日(水): 「源流学」と源流大学 宮林 茂幸(東京農業大学教授)  
源流の生活と文化 佐藤 英敏(小菅村源流振興課長)
- ②5月21日(水): 源流の自然を訪ねて 中村 幸人(東京農業大学教授)
- ③5月28日(水): 源流の森と森林再生 菅原 泉(東京農業大学准教授)
- ④6月 4日(水): 源流における雑穀文化 木俣美樹男(東京学芸大学教授)
- ⑤6月11日(水): 森の菜譜・古への「葉狩り」から 丹治富美子(作家)
- ⑥6月18日(水): 源流に学び、源流に生きる 中村文明(多摩川源流研究所長)
- ⑦6月25日(水): 「源流百年の森づくり」で地球温暖化に生き残る 矢野康明(東京電力)
- ⑧7月 2日(水): 多摩川を訪ねて 山道省三(NPO法人全国水環境交流会代表)

講座料: 定員/20名程度

(定員となりしだい締切)

座学のみ 10,000円

体験のみ 10,000円

(宿泊料など含む)

座学・体験 20,000円

問い合わせ・お申し込み:

東京農業大学エクステンションセンター

TEL: 03-5477-2562 (9:00~16:00)

URL: <http://www.nodai.ac.jp/outline/extension/>

# 第9回全国源流シンポジウム(案)

## 森と川と人をつなぐ

in  
長野県  
木祖村

～森は水の源・水は命の源・川は命のつながり～

日時:平成20年8月30日(土)～31日(日)

場所:長野県木祖村・木祖小学校他

### 第1日目:30日(土)9時～

#### ◆木曾川源流エクスカージョンその1(会費制1,500円)

- ・天然林で心のやすらぎを(水木沢天然林)
- ・床並の滝にこころ打たれて(床並沢)
- ・水辺で遊ぼう(水の始発駅)
- ・町並みの光を探そう(商店街散策)
- ・里山文化を子どもたちに伝えたい(木曾菅古道、民蘇堂野中眼科史料館)

#### ◆オープニング/雅音人コンサート

#### ◆基調講演/『木の文化と日本人の暮らし』 塩野 米松(作家)

#### ◆基調提言/『上下流連携と源流再生』 高橋 裕(東京大学名誉教授)

#### ◆特別報告(源流地域の取り組み事例発表)

#### ◆パネルディスカッション『源流の魅力は流域の宝』

コーディネーター/宮林 茂幸(東京農業大学教授)

パネリスト/中嶋 章雅(国土交通省河川局河川環境課長)

中村 文明(全国源流ネットワーク代表)

山登由紀子(名古屋大学大学院)

山田 雅雄(名古屋市副市長)

はばさき 市崎 理一(森の名手名人)

さわがし 澤頭 修自(実行委員長)

#### ◆伝統芸能と郷土料理の集い(会費制3,000円)

### 第2日目:31日(日)9時～15時

#### ◆木曾川源流エクスカージョンその2(会費制3,000円)

- ・木曾川源流散策(鉢盛山)
- ・樹齢550年のサワラを囲もう(原始の森、太古の森散策)
- ・旧中山道を偲ぶ、鳥居峠越え(鳥居峠～奈良井宿)
- ・野麦街道をゆく(野麦峠を散策)
- ・霊峰と壮大な高原(御嶽山麓に行く)

#### ★宿泊について

木祖村の旅館、民宿、ペンション、コテージなど

旅館、民宿は1泊5,500円～9,000円程度

※詳細については以下にお問い合わせ下さい

お問合せ先

第9回全国源流シンポジウム実行委員会事務局 木祖村役場産業振興課内

TEL:0264-36-2001 FAX:0264-36-3344 E-mail:genryusinpo@kisomura.com

主催:第9回全国源流シンポジウム実行委員会

共催:木祖村/全国源流の郷協議会/NPO法人全国源流ネットワーク

協力:木祖村議会/水資源機構味噌川ダム管理所/中部森林管理局木曾森林管理署/  
中部森林管理局木曾森林環境保全ふれあいセンター/木祖村商工会/水の始発駅フォーラム/  
木祖村公民館/木曾川上下流交流推進委員会/関西電力株式会社木曾電力システムセンター/  
木曾川漁業協同組合/NPO法人木曾ユネスコ協会/木曾広域連合/その他村内諸団体

協賛:社団法人中部建設協会(予定)

後援:国土交通省/環境省/林野庁/中日新聞社(予定)

河川環境管理財団「河川整備基金」助成事業(予定)

